近年のフェミニズム批判の成果により、『伸子』というテクトンに「婚約によって明るみに出された不毛の愛の認識を通して成長し、生きている女性の内面を描いた小説であり、離婚をテーマとした教養小説（水田宗次氏）という自立的な評価が与えられてきた。しかし、それは『伸子の単純素朴な成長』への信仰が、その価値をうちにそれが存在することのない不変の前提として彼女のあらゆる思考や行動を絞り込むことが結果的にも至ってしまった。「伸子の語ると自分の_APBしい生活を知りたいので、死ぬまでに一つでも、よい小説を書きたいのだ」という一文によって、肯定的な評価が与えられてきた。伸子の形面上的自己成長によって、今まで語られていた環境により左右され、人間関係の編組の中で行動の決定を後押しされる形で形成されるかを論証する。

博士後期課程
内山直樹
千宝『搜神記』考
—『搜神記』の語る歴史—

博士後期課程 三年 佐川 蕪子

『周礼』は、後漢にあっては師承が比較的明確である。かつ複数の注釈があるように、後に三礼として統括される『儀礼』『礼記』に比して、顕著なく学習されたことが窺われる。しかし、『周礼』は『古文尚書』『左傳』のように古文テキストとして表現されたことは否めない。これについては、『周礼』は王莽が支持したため、皇帝に忌避されたという見方がある。光武帝期に明帝期にかけて準備された礼制は、王莽は必ずしも忌避されている故事によっている。これによれば、王莽は必ずしも忌避されている Koreでなく、改めてその理由を検討する必要がある。

今回の発表では、当時の古文獻の様相、『周礼』学習者の意識等の検討を通じて、古文としてはの『周礼』の位置付けをみる。

『孟子』養心善於養欲章について

博士後期課程 三年 石原 原伸

千宝『搜神記』は、西晋末から東晉始めを史官として生きた千宝の手に『搜神記』は、さまざまな怪を取上げているが、中なる者である。『搜神記』は、さまざまな怪を取上げているが、中